阿波国蜂須賀氏の支城「阿波九城」について

福永素久

はじめに

天正十三（一五八五）年の豊臣秀吉による四国平定の戦功により、蜂須賀正勝（小六）は、阿波国十七万石を拝領され、子の家政にこれを譲り入部してきた。家政は、当初、一宮城（徳島市）に入城したがまもなく吉野川河口近くにある猪山に総石垣の徳島城を築き、徳島城を本城とし領内の要所九ヵ所にあった既存の中世城郭（撫養・脇・大西・川島・西条・一宮・牛岐・仁宇・海部）を改修し、「阿波九城」と称する支城を整備した。これらの支城は、寛永十五（一六三八）年の一国一城令（以下、寛永令）まで存続したといわれ[1]、蜂須賀家の近世初頭における領国支配の特徴といえる。

筆者（福永）はこれまで、本誌前号（第三六号）で島津氏を、平成十八（二〇〇六）年三月刊行の『大分県地方史』第一九七号において細川氏を事例に、各大名による近世初頭の城郭制度（支城整備）と領国支配について考察してきた[2]。そして、近世初頭における大名は、豊臣・徳川の公権力によって承認され、拝領された領地をいかに統治するか、隣接する他の近世大名との緊張関係の中、公権力に淘汰されないよう考え、それが支城配置・城郭政策にどう反映されたかを検証してきた。今回はそれらの反省点を踏まえたうえで、阿波国蜂須賀家の事例を上げ、近世期における支城制度の再編・確立を当時の歴史的背景から考察しようと試みるものである。

阿波九城制度は元和元（一六一五）年の一国一城令により、次々と破却される他の近世大名の支城に対して、寛永まで存続できた事は特異といえるし、その間にも、海部城を舞台とする家臣に対する改易騒動「益田豊後事件」等の家臣団再編が、この制度と密接に関わっている事が考えられるので、意義のあるテーマだといえよう。よって本稿ではそれらを研究目的とし、文献史料と縄張り論から検討を加える事にする。先行研究においては、縄張り論から本田昇氏と高田徹氏による研究が挙げられる。今回はこれらを踏まえさらに検討を行いたい。本稿は、筆者の阿波九城研究の出発点として位置づけるものとする。

一、「阿波九城」制度と各支城の展開

（一）「阿波九城制度」について

冒頭でも触れたように、豊臣秀吉により阿波国十七万石を拝領された蜂須賀氏は、すぐさま支城整備に取り掛かっている。しかし当時の史料は少なく、近世以降に編纂された史料を使わざるを得ない。江戸後期に編纂された「阿淡年表秘録」の天正十三年の項の中に、以下のように記されている。

【史料一】

始而御政事方被仰付
名東郡一宮城

益田宮内少輔
那賀郡牛岐城今富岡ト改
細山帯刀政慶
后賀島主水ト改
同郡仁宇山城
山田織部佐宗登（八郎右衛門宗重の誤りカ）
海部郡鞆城※（五千石）
中村右近太夫重友
始大多和長右衛門正之
御城番被仰付高三千石余之
御代官役被仰付
板野郡撫養※（町）湊城
益田内膳正正忠
同郡西条ノ城
森監物某
麻植郡川嶋城※（五千五百石）
林図書助能勝
美馬郡脇城
稲田左馬允植元
三好郡池田城
牛田掃部助
初柳原又右ヱ門
右御城番追々被仰付各兵士
三百宛被仰之
右城主之面々へ従秀吉公御
小袖弐充被下之

（『阿淡年表秘録』『徳島県史料』）

とある[3]。蜂須賀氏が阿波へ入国したが、それは同年六月以降であるから、すでに一宮城から、徳島城へ移転したことになる。このように、「阿波九城」は整備された（**表一・図一**）。しかし、その後に後述するも、短期間のうちに徳島城を普請移転したとは考えられない。そこでこの史料が、後世の編纂史料である事、そして徳島城の普請の期間と他の支城の改修作業の時間差を考えるならば、阿波に入部して直後に徳島城の普請を決め、支城を選定し家臣を城代として置く事を前提とした作業を行ったと考えられる。つまりは、支城を置く事は決まっていても、天正十三年内ではまだ未整備だった事が窺えられる。

城　名	位　置	初代城主	石　高
一宮城	名東郡	益田宮内少輔持正	不　明
牛岐城	海部郡	細山（賀嶋）帯刀	10,000 石
仁宇山城	那賀郡	山田織部佐宗重	5000 石
海部城	海部郡	中村右近太夫重友	5000 石
撫養城	板野郡	益田内膳正正忠	5000 石
西条城	板野郡	森監物某	5500 石
川島城	麻植郡	林図書能勝道感	5500 石
脇城	美馬郡	稲田左馬允植元	4700 石
大西城	三好郡	牛田掃部助一長	5300 石

表１　支城主一覧表（天正 14（1586）年当時）

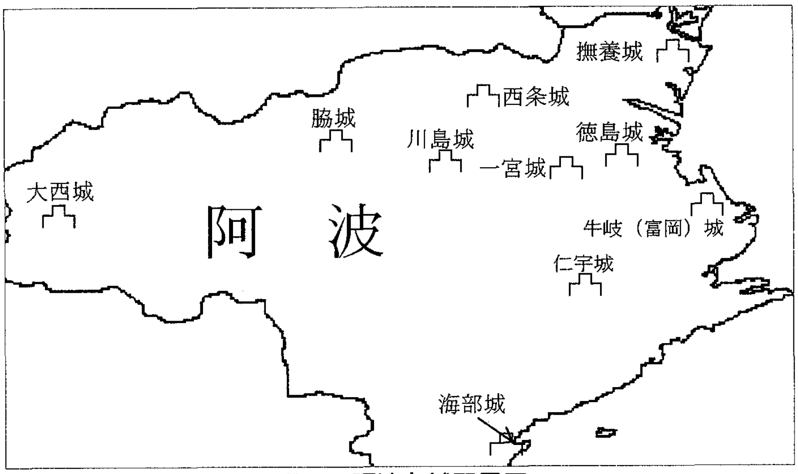


図１　阿波九城配置図

表一・史料一のように、後に詳細に述べるも、赴任された支城主は千石単位の大身であり、近世初頭における蜂須賀家家臣団の中でも筆頭クラスの家老が赴任されている事がわかる。そして、各支城には三〇〇人ずつが蜂須賀本家より、宛てられている事がわかる。この兵三〇〇人という数字は、同じ徳島藩が編纂した地誌書『阿波志』(4)記載の城館の項目にも出ており、支城が置かれた地域において近世期全般に刊行された各群村誌にも同じ記載がある。よって、この数字は、一次史料が少ない今日定説となっている。また、その役儀については、家政が天正一四（一五八六）年に池田（大西）支城主であった牛田掃部助に宛てた史料で窺える事ができる。

【史料二】

定条間々

一三好郡奉行其方預置候間、毎月二度宛廻人、小給人付百姓等、非道申懸候か、又ハ如何様之構にても百姓所を明走候か、其外百姓申分候者、召寄可被聞届也、可随事ハ給人謂事申候事ハ、可成敗事

一去年之未進方、其所之当給人ニ預置候様可令催促事

一年貢升ハ大坂之写也、ほんを出置候上大成を用候者可令成敗事

一人定之儀者不論前後可為知行付、但侍ハ此外なる之事

一誰々に遣候知行之内成共、用材伐事不寄給人百姓可有政道之事

天正十四年七月廿五日

（「阿淡年表秘録」）

とある(5)。これら史料一・二より蜂須賀家より兵が宛われ、城代が郡奉行と兼ねていた事がわかる。さらに、史料一では「従秀吉公御小袖弐充被下之」とあり、支城主には秀吉より小袖二着賜った事からも、阿波九城の成立には蜂須賀家よりも、豊臣政権の意向が窺われる。

（二）徳島城と阿波九城の各概要と縄張り構造

・徳島城（徳島市・本城）

徳島市城之内に位置する（図二）。徳島市の中心地に位置し、北に助任川と南に寺島川（明治期徳島駅建設により、ほぼ全壊）に挟まれた猪山（六一・九ｍ）に築かれた。元々中世以来、阿波国守護細川頼之が至徳二（一三八五）年に築城したのが始まりで、家臣の三島外記が城代を務めた。もともと猪山は、当時守護所のあった勝瑞（板野郡藍住町）も見えて、土佐街道や南海道の交通の要衝でもあった。また、麓には在地領主である福良出羽守が寺島城を築いている。近世期蜂須賀家政が阿波

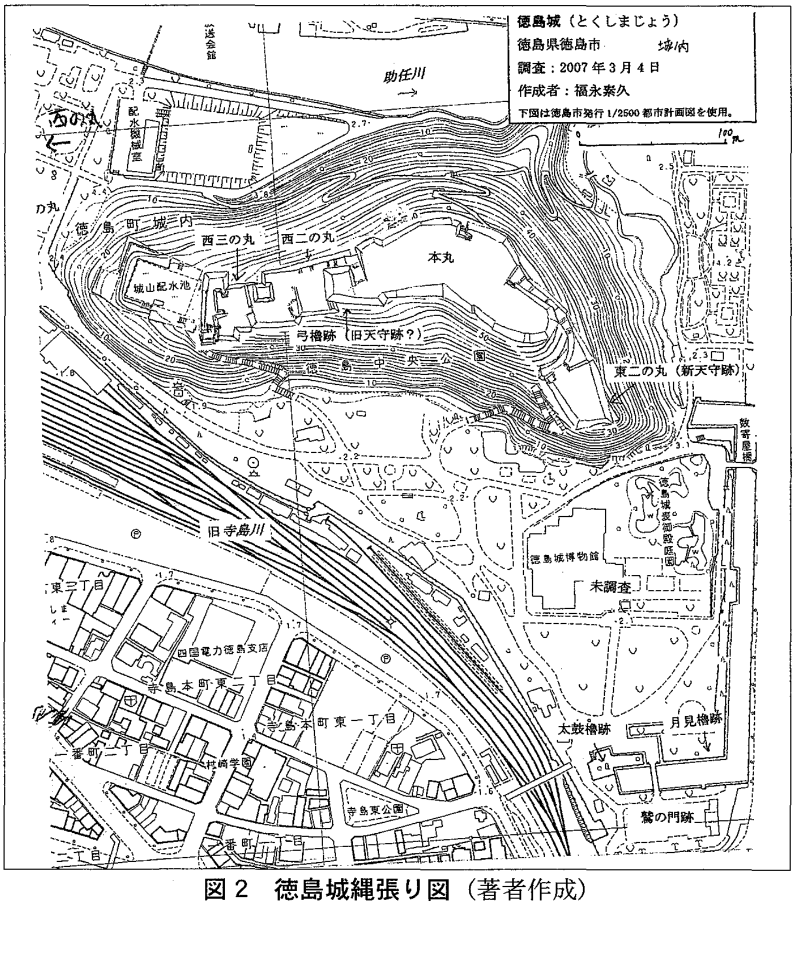


図２　徳島城縄張り図（著者作成）

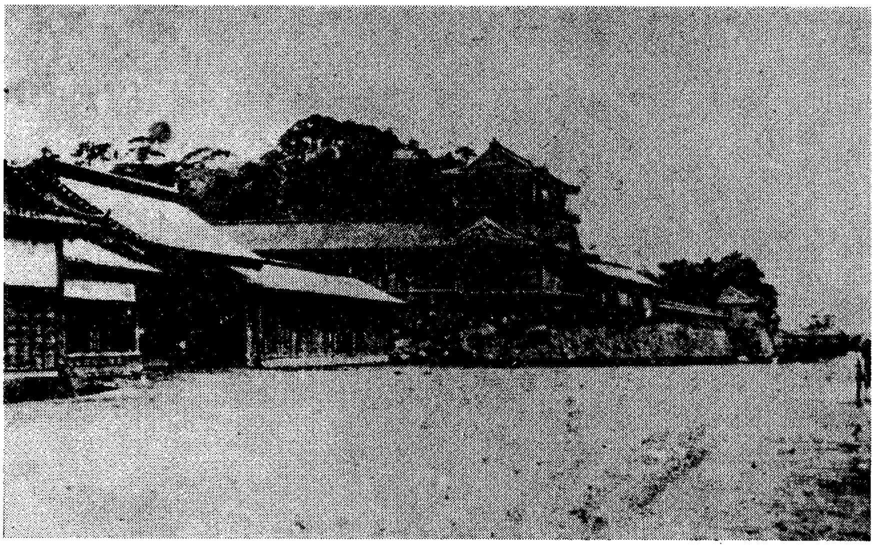


写真１　徳島城古写真（撮影明治初期、徳島市立徳島城博物館所蔵。中央やや右よりの山中の白い部分が天主上部。）

に入部して、徳島城を築く際この両城を合わせて、改修されたといえるだろう。

縄張り構造としては、総石垣の城では徳島県内では唯一だといえるだろう。また近年の調査では現存している石垣の中に古い石垣が存在していることが、地下レーダー探査で判明し、蜂須賀氏による築城当初は全体的に現在の三m石垣の高さが低く、規模が小さかった事が考えられる⑹。

一方で、天守閣の位置が通常は本丸にあるはずが、一段下がった東二の丸にある事も特徴といえる。明治期の廃城令により、取り壊される直前に撮影された古写真によれば（**写真一**）、山腹に最上部分が写っている事がわかる。実は、築城当初は本丸に天守があり、図二中にある弓櫓跡がその天守台とされている。そして、『御大典記念阿波藩民政資料』上巻所収の史料には、こう記されている。

【史料三】

急度染筆候、仍山之古てんしゅとりこぼし候間、手伝人之儀、のほりさし・長柄之者一人も無相違召連罷出、早々」とりこぼし、材木は対馬家之東に可積置候、能入念、壱本もうせ候はぬやう可仕候、聊以下有油断候、謹言

十月十四日　阿波守（花押）

井後新次郎とのへ・青山勝蔵とのへ・梯九蔵とのへ・梯三郎とのへ・
太田彦兵衛とのへ

「古天主取潰申付御状」

とある⑺。この史料は昭和三（一九二八）年に昭和天皇の即位にあたる御大典を記念して、編纂された史料集に所収されているので、二次史料といえども慎重に扱う必要がある。年号は書かれていないが、史料中の蜂須賀対馬は慶長～元和期にいた蜂須賀分家であり、この史料は蜂須賀対馬が生存された時期に作成されたとみられる。つまりは、この史料によると徳島城が天主を破却し、廃

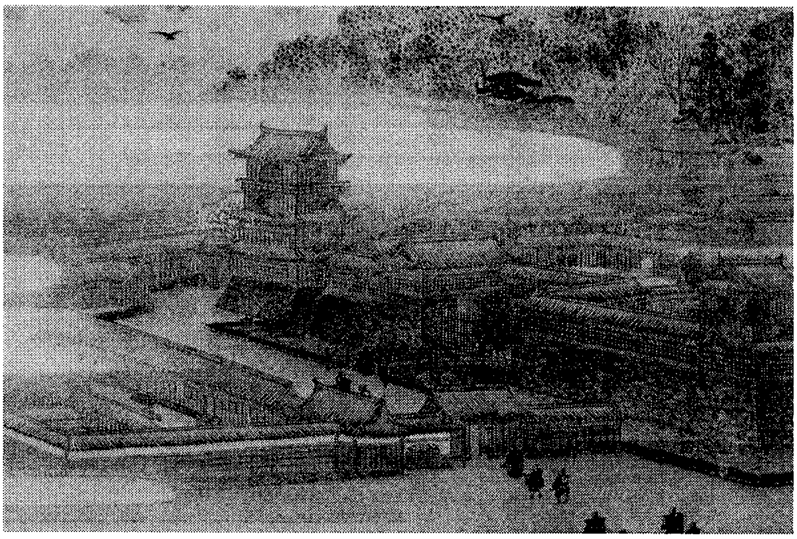


図３　太鼓櫓（須木一胤作『徳島城図』より）

材を対馬守屋敷の東にあった空き地に集めた。そして、その廃材を利用して大手門西に太鼓櫓として再建されたといわれている（図三）。三好昭一郎氏は、天主を破却した理由を次のように述べている(8)。

その天守の取り潰しの理由には諸説ある。しかし、二つの有力な説は天守の老朽化が進んでいたとする説と、一国一城令において公儀に対する遠慮から、福岡藩の事例もあり、外様大名が申し合わせて天守を建てなかったように、蜂須賀至鎮（二代藩主）も自ら解体させたと考える説に分かれているが、拙考（三好氏の考えは）では幕府に対する遠慮と同時に、本来の拙速工事のため老朽化がすすんでいたものと考えておきたい。

としている。徳島城築城に関しては、豊臣秀吉の命により小早川隆景や長宗我部氏等の大名や、高野山の僧兵も築城に関わっている。しかも一宮城から天正一四（一五八六）年には、徳島城へ入城している事から、突貫工事であったことが考えられる。その理由は後述するも、その突貫工事ゆえ老朽化が進んだ事は否められない。三好氏はその上で、本丸の天主を壊し、当初東三の丸にあった三階櫓を天守閣として明治維新まで代用したとしている。

・一宮城（徳島市）

徳島市一宮町に位置する。徳島城と眉山を挟み徳島城下にも最も近い四国山地の入り口にある。元来在地の一宮氏の居城であったが、天正十（一五八二）年の土佐の長宗我部元親の侵攻の際、一宮成祐が夷山城（徳島市八万町）において長宗我部氏により謀殺され、長宗我部氏家臣江村親俊と谷忠澄が城代を勤めた。天正十三（一五八五）年の豊臣秀吉による四国平定により、当城は豊臣秀長らに攻められて開城となり、蜂須賀氏が阿波の入部と同時に徳島城築城までの期間居城とした。徳島城移転後は、家臣益田長行が城代を勤めている。益田氏は蜂須賀氏と豊臣家家臣として同輩であり、阿波に入る直前の播磨龍野以来与力家老となり、稲田氏・賀嶋氏に次ぐ重鎮であった。

一宮城は（図四）、徳島県下最大の中世城郭として知られるように、標高一四四mの山頂にある主郭を中心に、山麓まで曲輪が展開している。その背景には、豊臣秀吉による四国平定に際し、長宗我部氏が城周辺に大規模な付城を構え、家臣の江村親俊と谷忠澄を在番させた事から、長宗我部氏による大規模な改修があっ

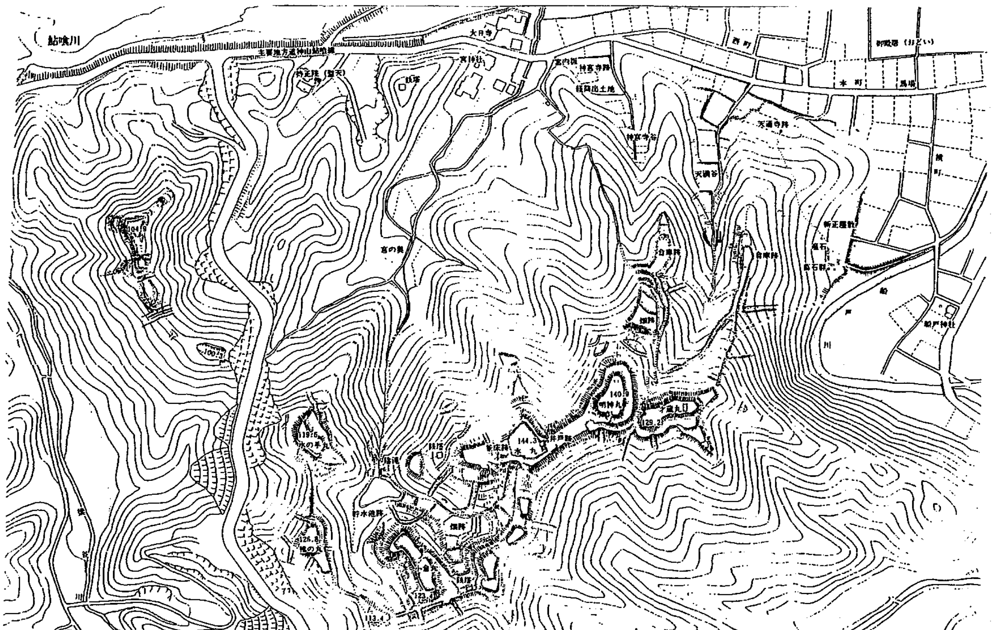


図４　一宮城縄張り図（本田昇氏作図『中世城郭研究事典』第三巻より転載）

た事が、窺えられる。そして、蜂須賀氏入部後に主郭を中心に野面積みの石垣が積まれたと考えられる。

・撫養城（鳴門市）

別名岡崎城・林崎城ともよばれる。鳴門市の妙見山山上にあり、築城時期は不明。蜂須賀氏入部後は、益田内膳正忠が支城主を勤めている。内膳は蜂須賀家政父正勝（小六）の異母弟にあたる。

城地は現在、人類学者である鳥居龍三の記念館があるため、改変が著しいが、文久三（一八六三）年に作成された、「撫養地図」[9]（**図五**）や江戸後期に作成された「阿州撫養林崎古城山細見之図」[10]（**図六**）から、その城域を把握する事ができる。また天保元（一八三〇）年に建立された妙見神社の裏にも城の石垣が見られ、石垣を有していた事が窺われる。

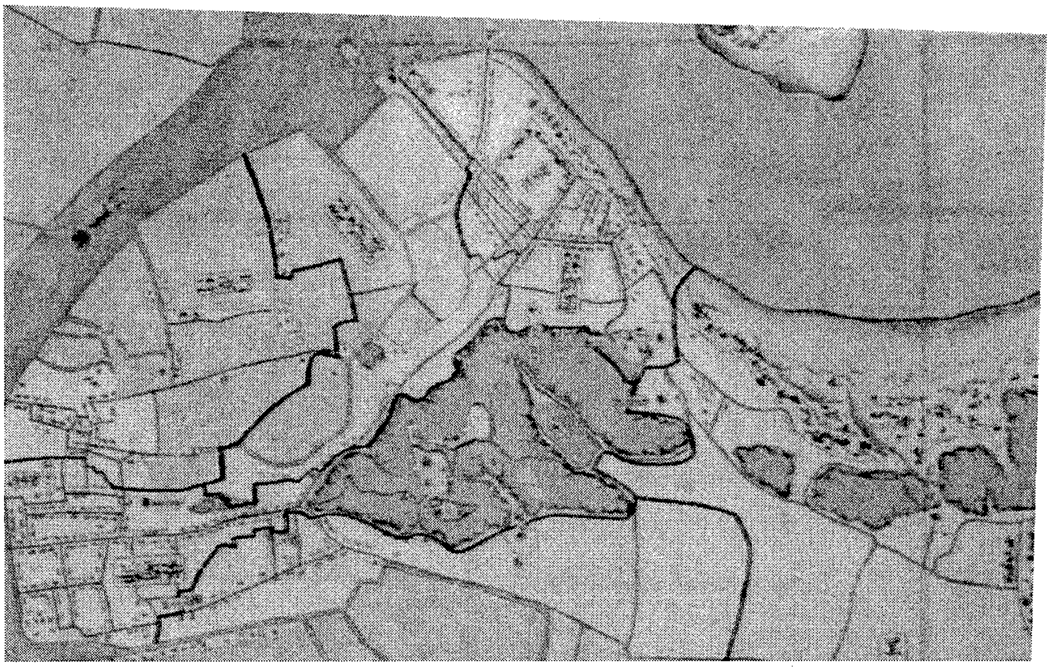


図５　「撫養地図」

図６　「阿州撫養林崎古城山細見図」

・西条城（阿波市）

阿波市吉野町にある。詳しい築城時期は不明であるが、戦国期において細川持隆家臣の岡本美作守清宗が居城している。長宗我部氏の侵攻による落城を経て、蜂須賀氏入部時には、森監物が支城主として赴任している。

城跡は現在田地と後世による開墾によって、現況は不明である。しかし昭和五一（一九七六）年撮影の航空写真や（**図七**）[11]、明治初期に作成された地籍図（**図八**）[12]により、方形の居館であった事が窺えられ、旧来の中世城郭を踏襲したものと考えられる。

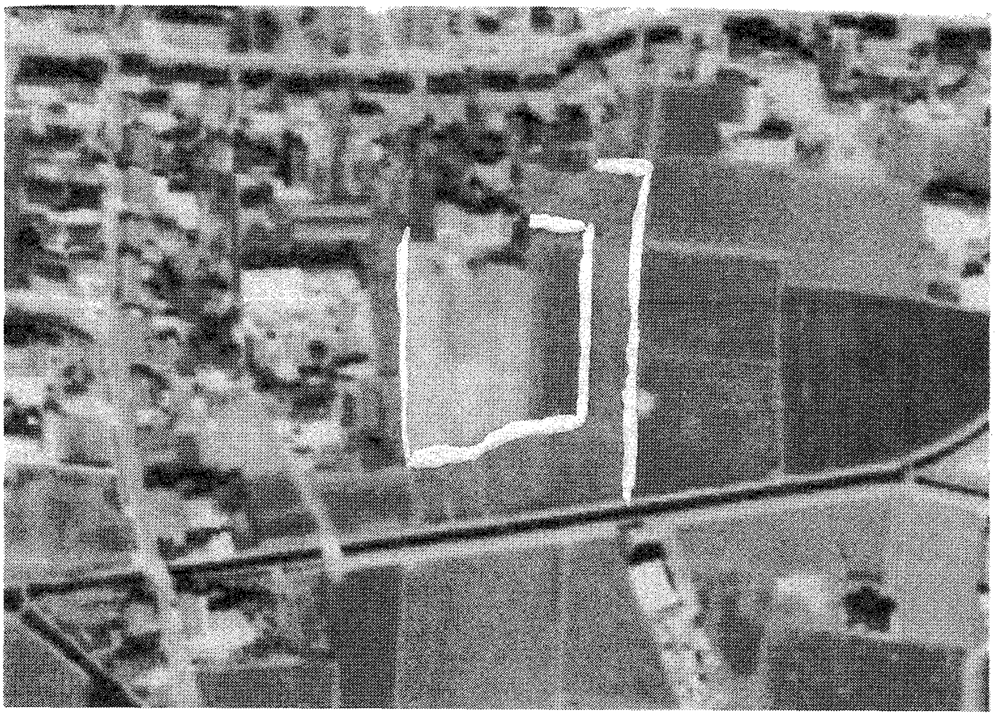
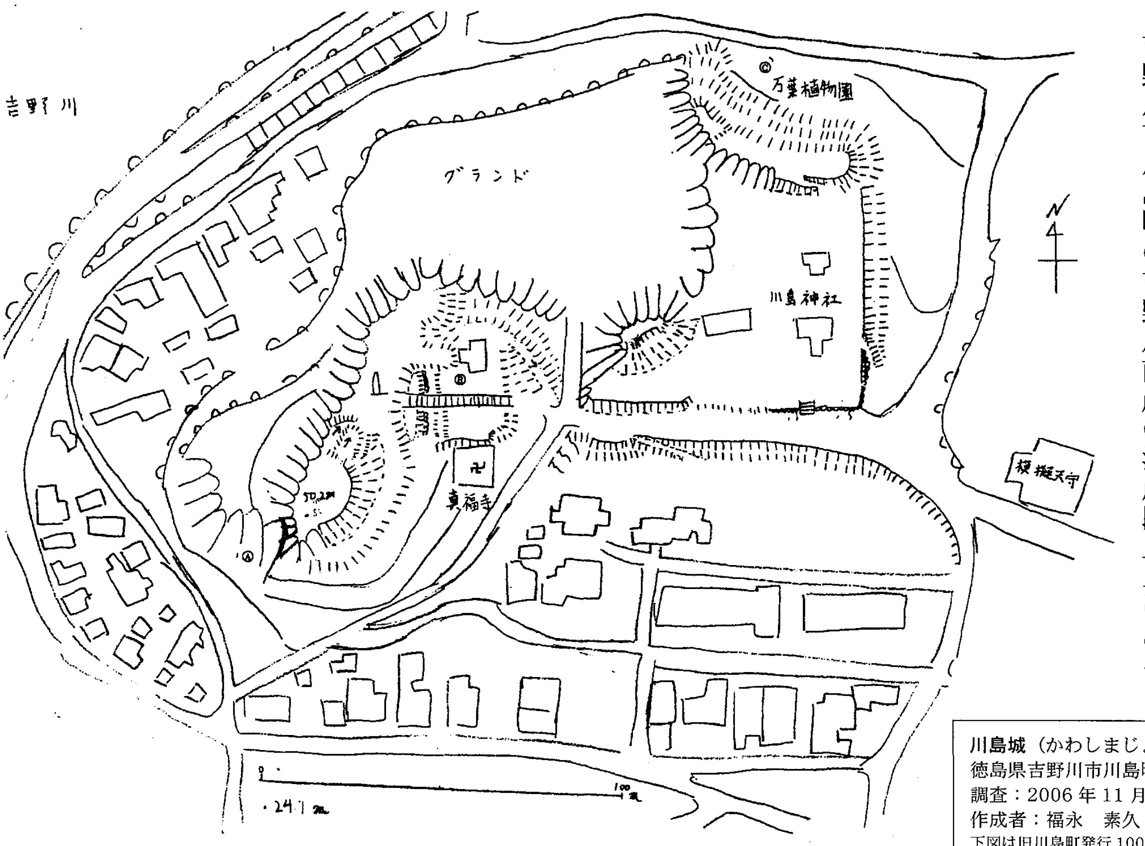


図7　航空写真（白線は推定城域。S＝1/10000）

図8　地籍図（明治初頭作成。S＝1/7000）

・川島城（吉野川市）

吉野川市川島町の吉野川南岸の河岸段丘上にある。



川島城（かわしまじょう）
徳島県吉野川市川島町城山
調査：2006年11月23日
作成者：福永　素久
下図は旧川島町発行10000/1地形図を使用

図9　川島城縄張り（現況）**図**（筆者作図）

戦国期以来三好長慶一族の川島氏の居城であった。蜂須賀氏入部後は、林図書道感が支城主を勤めている。林図書は、慶長二〇（一六一五）年の大坂夏の陣で、蜂須賀の陣に紛れ込んだ敵を退治したとして、徳川家康より感状をもらっている。

縄張り図**（図九）**上にある模擬天守が建っているところは、本来の城域ではなく、西側の道路を挟んで川島神社（大正一四年現在地へ移転）より西にあった。主郭（本丸）の大半は後世の土取りや植物園による開発で破壊されているが、標高五二mの通称「岩の鼻」周辺（図中Ⓐ）に展開していた。また、森文庫の「川島町全図」**（図一〇）**には、川島城の城域がある程度把握できる。築城前にあった大日寺の礎石を利用した石垣が主郭東直下に積まれている（図中Ⓑ）。この石垣は後世に積み直されたとも考えられるが、石垣を有していた城郭であった事が窺える。また、また川島神社北にある曲輪より吉野川へ落ちる斜

図10　川島町全図
（森文庫所収（徳島県立図書館所蔵）、作者作成年不詳。
一部を拡大、筆者がトレース）

面に、帯曲輪のような細長い段があるが、これは植物園（図中©）による植樹の際にできたものと考えられる。

・脇城（美馬市）

美馬市脇町の吉野川北岸の河岸段丘上にある。鎌倉末期、讃岐国司末裔である脇氏が築城されたとされる。戦国期においては、武田上野介信顕が居城している。天正十年の長宗我部氏侵攻により落城し、四国平定までは長宗我部親吉が在番していた。平定後は、蜂須賀家筆頭家老である稲田左馬亮植元が支城主を務めている。

脇城（**図一一**）は段丘東端を主郭（図中Ⅰ）とし、曲輪Ⅱ・Ⅲと続いている。曲輪Ⅱ・Ⅲは畑地となっており、現況が良くはないが、曲輪Ⅰは遺構を良好に残している。曲輪Ⅰは、南北八〇m×東西一六〇mで入り口には枡形虎口を有している。曲輪ⅠとⅡにまたがる空堀には、土橋が架けられており土橋両脇には石垣遺構が確認されている。麓にある城代稲田氏の菩提寺である、貞信寺周辺は居館部分とされ大字「大屋敷」として残っている⑬。

・大西城（三好市）

三好市池田町にあり、吉野川上流の南岸にある河岸段丘に築かれ別名池田城と呼ばれる。鎌倉末期、阿波国守護だった小笠原長清によっ

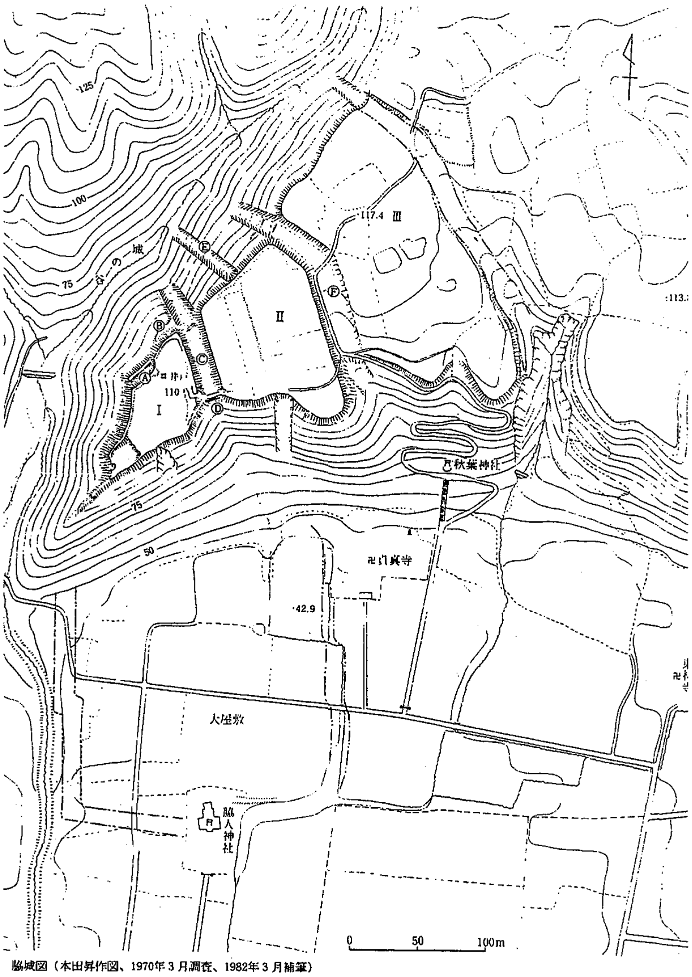


図 11　脇城縄張り図
（本田昇氏作図。『中世城郭事典』第３巻より転載。）

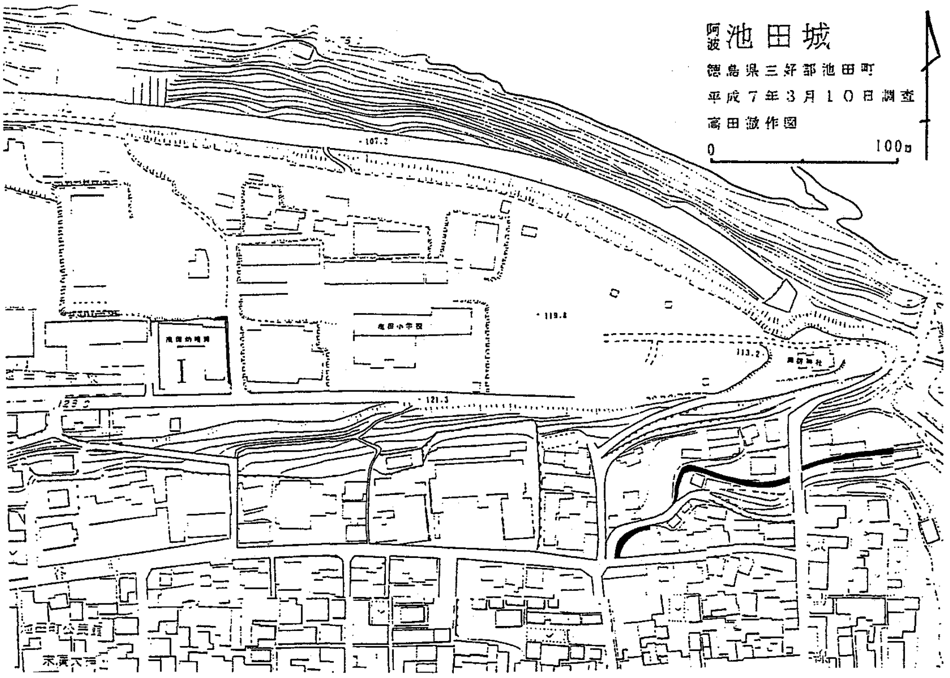


図 12　大西城縄張り図（高田徹氏作図。高田氏論文より転載。）

て築城されたのがはじまりとされている。蜂須賀氏入部後は、牛田掃部一長が城代を務めている。

現在遺構は（図一二）、池田幼稚園にある石垣が一部残っている他は、全体を観察する事は難しい。高田氏は蜂須賀氏時代、池田（大西）城は、現在の池田小学校あたりまでを範囲に方形で区画された構造であると、指摘している。

・**牛岐城**（阿南市）

阿南市にあり、天正十四年に牛岐から富岡と地名を改めているので、富岡城とも呼ばれている。戦国期には、牛牧庄の地頭であった新開氏の居城であった。天正十（一五八二）年、新開道善が丈六寺（徳島市丈六町）において、長宗我部方に誅殺されると、その親戚に当たる香我部泰親が入った。蜂須賀氏阿波入部後は、細山帯刀（後の賀島主水）政慶が支城主を勤めた。

縄張り構造は（**図一三**）、北に桑野川が流れ当初は瓢箪型の小山に展開し、その周囲に掘（水堀か）が巡っていた。文政年間に作成された分間絵図（**図一四**）にもそれが窺える。しかし、大正初期に道路建設の際、南北に分断され現在に至っている。しかも高田徹氏が調査された後にも改変がすすみ、現状ではほぼ全壊の状況にある。一方で、阿南市商工会議所が産業記念館（現・牛岐城資料館）の建設に伴う発掘調査があり、主郭部分に石垣が確認され徳島城と同様野面積みである事が判明している。

・**仁宇（山）城**（那賀町）

那賀郡那賀町鷲敷にある。別名和食城とも呼ばれ、那賀川南岸に築かれた。天正年間（一五七三〜九二）は湯浅対馬守の居城であった。長宗我部氏の侵入時にも在城した。後述するも、湯浅氏は蜂須賀氏入部直後に起こった土豪一揆の首謀者であり、蜂須賀氏が鎮圧した戦功により、山田織部正宗重が支城主を勤めた。宗重と蜂須賀家は尾張時代からの関

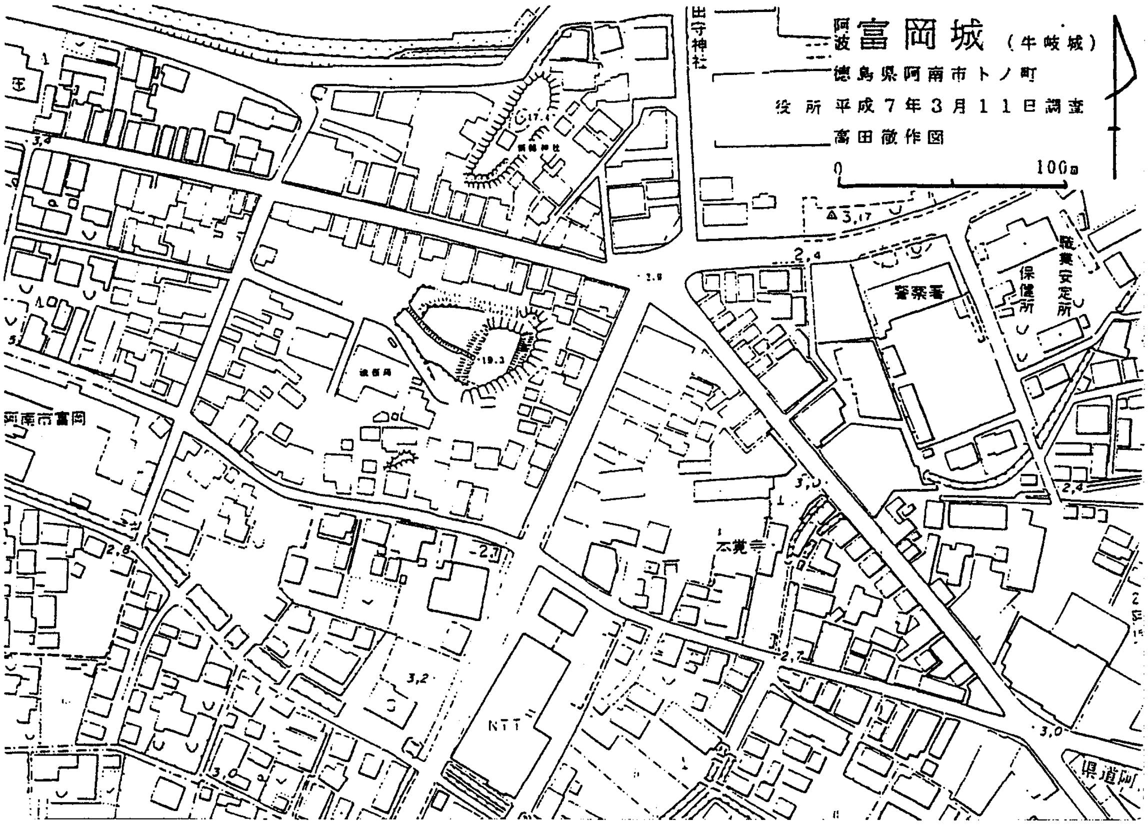


図 13　牛岐（富岡）城縄張り図（高田徹氏作図。高田氏論文より転載。）

係で、蜂須賀正勝（小六）に従ってきた古参の家臣といえよう。

仁宇山城は、那賀川右岸の蛭子神社境内にあったと比定されている（**図一五**）[14]。しかし本田氏は『日本城郭大系』において、当比低地より、西へ約一・八㎞離れた小仁宇城を九城として指している（**図一六**）[15]。

蛭子神社にある遺構は、北東側を中心に良好に残っている。北端部分は櫓台（幅五m×長さ一一m）があり、東側には土橋が掛かっている（図中Ⓑ）。そして土橋を挟んで櫓台Ⓒ（幅二m×長さ四m）がある事から、虎口である事が考えられる。南端には、櫓台Ⓓがあり（幅一二m×長さ一五m）、西端部分にも、櫓台の一部と思われるⒺがある。それらの事から一部破壊されているものの、端に櫓台が配置され、空堀で囲った方形居館の形を呈していた事が推測される。一方で小仁宇城は遺構が残っ

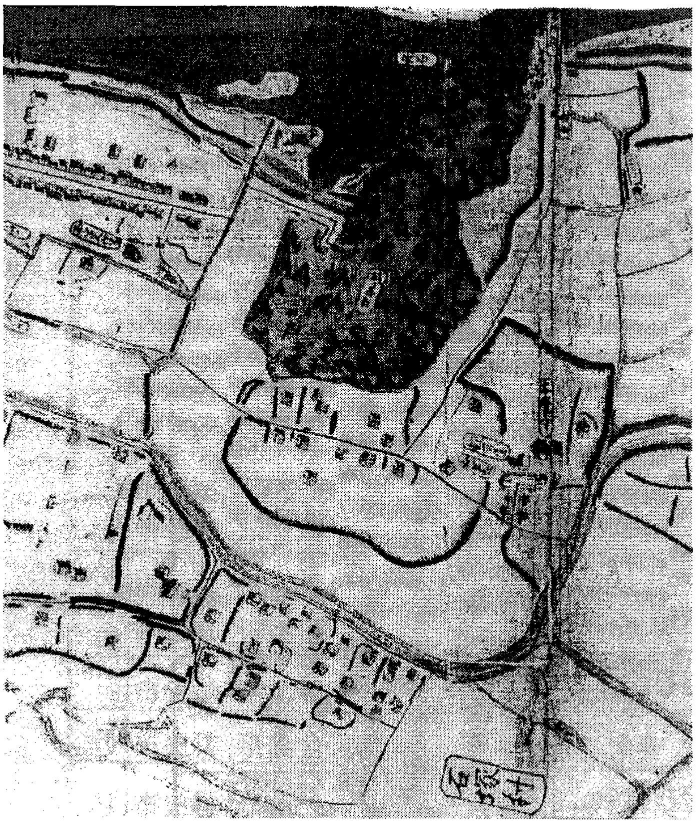


図 14　江戸期分間絵図に記された牛岐城
（中央には「城屋敷」と表記している。）

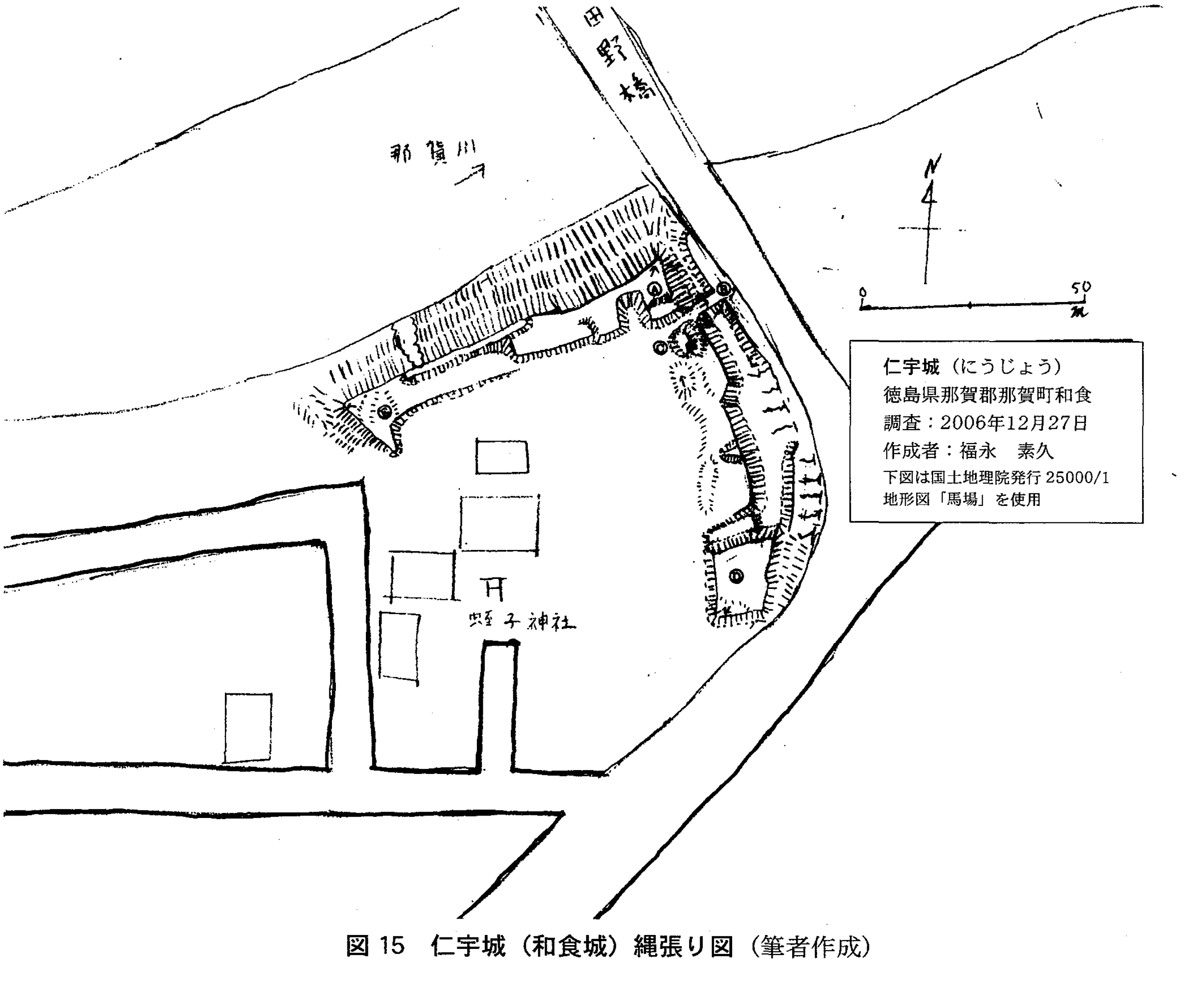


図 15　仁宇城（和食城）縄張り図（筆者作成）

ていないので、本田氏の図面では小規模で、典型的な阿波の中世城館の特徴を示している(16)。また、蜂須賀氏入部後、山田宗重は和食へ居城したということから、当初の湯浅氏が居城としていた小仁宇城を破棄し、和食にあった既存の中世城館を改修し、現在に見られる様相になったとも考えられる。よって、蛭子神社にある遺構が、山田氏が在番した時の仁宇城である可能性が高い。

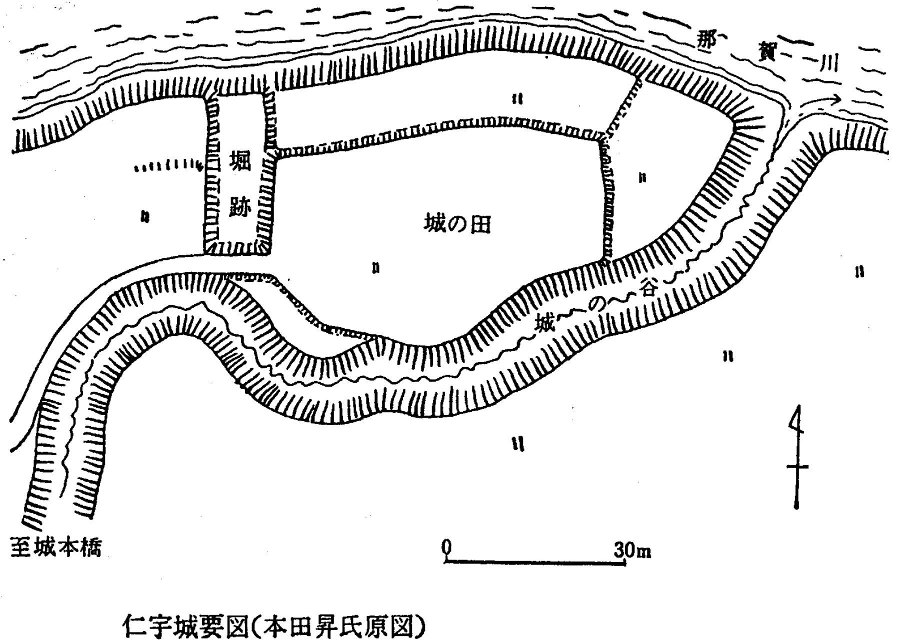


図 16　本田昇氏作成の仁宇城
（本田昇氏作図。『日本城郭大系』第 15 巻より転載。）

・海部城（海陽町）

海部郡海陽町奥浦にある。海部川河口南岸にある小山に築かれた、阿波国最南端に位置する支城である。海部城は元々海部左近将言友光が、元亀二・三（一五七一、一五七二）年頃に築城したのが始まりとされている。しかし、天正三（一五七五）年に土佐の長宗我部元親の侵攻により落城した(17)。その後、元親の弟香宗我部親泰が城番を勤めたが、牛岐城（阿南市）へ移った後、田中長政が在番を勤めたといわれている。その後阿波蜂須賀氏がはいると、海部城には大多和長右衛門が支城主として赴任し、中村重友・益田長行と支城主が代わった。

縄張り構造は**（図一七）**、標高約五四ｍの主郭（図中Ⅰ）を中心に細長く展開している。第二次世界大戦中に、高射砲を置いた事から改変がみられ、主郭直下には城の石垣を利用した（積み直した）アーチ型の門が見られ、主郭にも砲台跡らしき遺構が見られる（図中Ⓐ）。またⒶの脇には、幅５ｍ全長約一五ｍの櫓台が見え、多聞櫓が配置された可能性がある。また石垣が主郭以外にも図～にも見られ、城郭全体に石垣を有していた事が窺えられる。曲輪Ⅸは土塁が巡っており、一箇所だけ囲っていない所がある。高田氏は、曲輪Ⅸを枡形虎口として表記している。虎口部分は崩落により正確な確認はできないものの、その背後に続く曲輪Ⅷから主郭へ続く過程で、竪堀がある事（図中Ⓗ・Ⓘ）、それらの曲輪を繋ぐ虎口がはっきりしている。そして、居館部分（近世では御陣屋）が東側にあった事から、曲輪Ⅸが大手であった事が考えられる。

㈢　先行研究について

阿波九城制度の先行研究について、縄張り論からの考察として、本田昇氏は「阿波の中世城郭」の中で、阿波九城を徳島城も含め、阿波国内に初めて展開された織豊系（近世）城郭と評価しつつも、他の領国と比

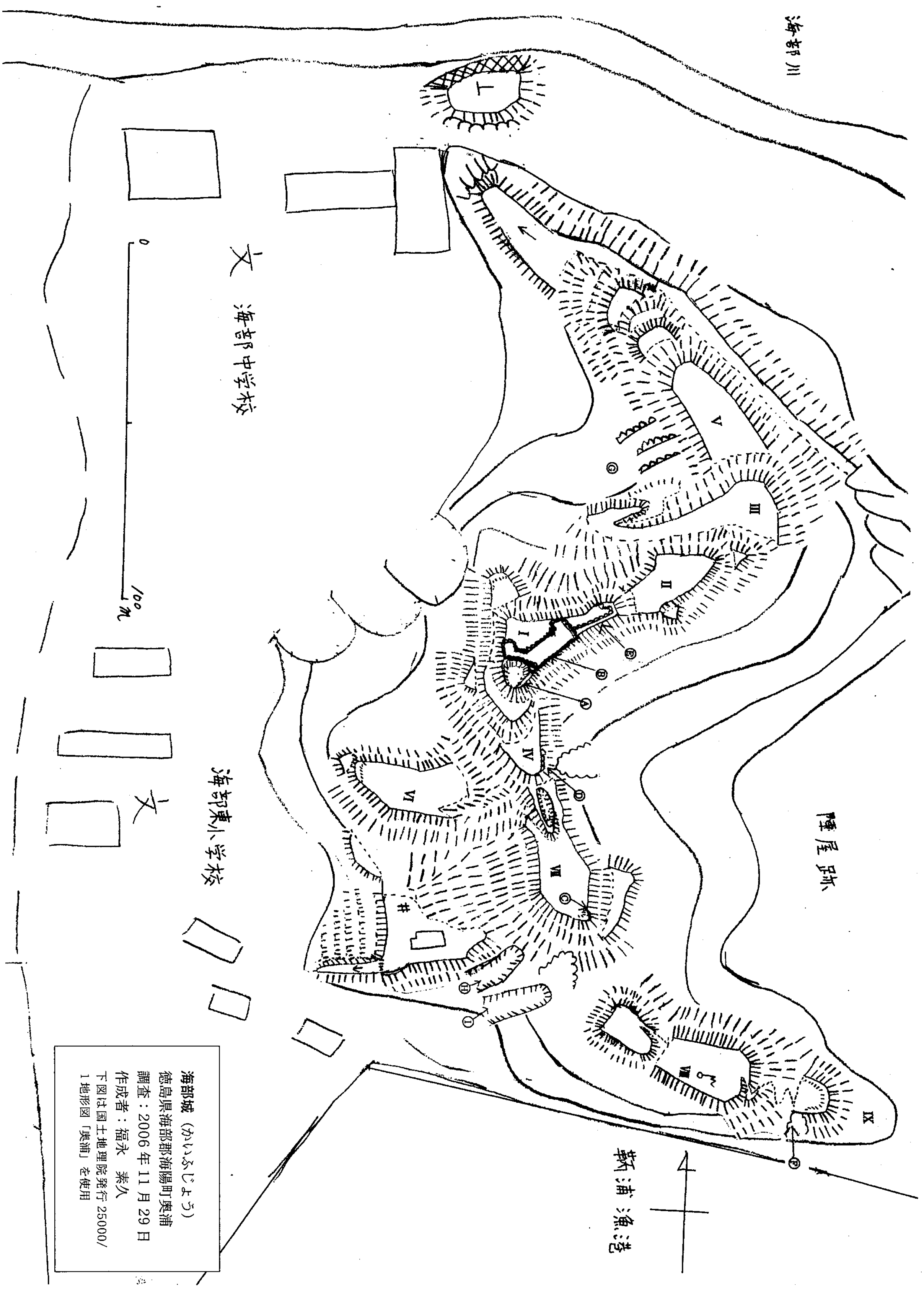
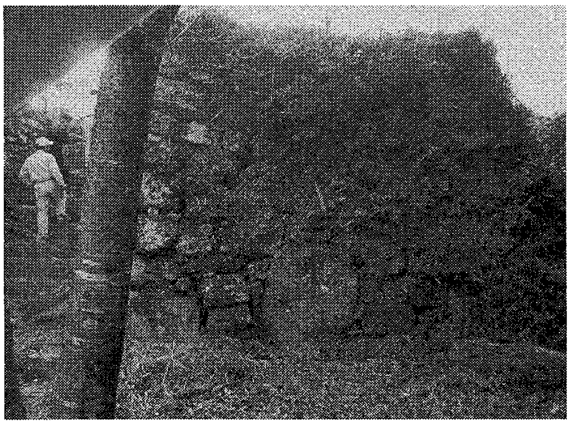


図17　海部城縄張り図（筆者作図）

写真２　阿波九城に現存する石垣遺構



一宮城

川島城

撫養城

富岡（牛岐）城

海部城

池田（大西）城

脇城

※脇城と池田城の写真は、中世城郭研究会ＨＰ
(http://www.komazawa-u.ac.jp/~kazov/chujoken/)より転載。

べてその規模が小規模であると指摘している(18)。本章(二)で述べたように、西条城・川島城・仁宇山城では確認できないものの、織豊系城郭の特徴である布目積みの野面積み石垣が確認され(写真二)、瓦片も表面採集で確認されている。しかしそれは主郭を中心とした限定的なもので、既存の中世城郭を最小限に改修されたとも考えられている。そこで、本田氏はその理由として、徳川政権に遠慮をしていたのだと論じている(19)。

またその縄張り構造が小規模な理由として、ただ公儀に遠慮していたのであれば、元和元年(一六一五)の一国一城令(以下、元和令)に廃城になってもおかしくないのであるが、それが寛永令によるものか元和令によるものか、意見が分かれている。寛永までに支城が存続できたとするには、遠慮以外に他に理由があると筆者は考える。

高田徹氏は、図一の配置図で見られるように、境目にある(海部・大西・岡崎)と、その城郭の中継地点に位置する(富岡・仁宇・脇・川島・一宮・西条)と分かれると指摘している。そして後世の破壊により、全貌が見えないとあるものの、中世城郭をそのまま踏襲した(仁宇)、部分的な改修がみられた(海部・大西)、全体的な改修が見られた(一宮・脇・撫養)と分けることができるとしている(20)。

文献史学の面では、史料が乏しく具体的な検証ができなかったのであるが、三好昭一郎氏は『近世地方都市成立史の研究』の中で、阿波九城と一国一城令との関わりに触れ、従来一国一城令の解釈として、幕府の大名統制の一環として解釈された従来の解釈よりも、戦時を想定した分権的支配体制を改め、仕置権を蜂須賀氏へ委譲する「大名支援策」として捉えた。そして、九城の廃止後、城番の家老・兵が徳島城下に集まり、後の徳島城下町再編に繋がったとしている(21)。

しかし、近世大名の支城再編について、筆者がいままで取り上げてきたように(はじめに参照)、再編には統一政権(公権力)の意図があるものの、判断するのはその領地を安堵された大名であり、一国一城令が出される前の仕置権はその大名が持っていたと考える。(一宮城を除く)郡奉行の存在もその例である。また、三好氏は阿波九城は元和元(一六一五)年の一国一城令で廃城となったと指摘し、元和令で城の作事部分(建造物)が取り壊され、寛永令で事実上廃城になったとしている(22)。

(四)小結

阿波九城は、本城にあたる徳島城とは異なり、既存の中世城館を再利用し主郭中心に織豊系城郭に改変した事から、短期間のうちに改修され利用されて行った事が縄張り構造ら窺う事ができる。また阿波九城の廃止について、寛永令によるものか元和令によるものか、意見が分かれている。そして、寛永令による廃城が定説となりつつあるので、本論では寛永令を支持する事を前提として、何故寛永令まで存続できたのか、その背景を次章で土豪一揆と益田事件を重点に置いて、考察したい。

また、各支城を描いた既存の縄張り図が発表されて、一〇年以上経っていることからも、本田氏と高田氏が考察してきた内容も再検討する必要もあることを付け加えておきたい。

二、支城制度確立と国内問題

(一)土豪一揆との関わりについて

豊臣・徳川両統一政権から安堵された大名が、拝領された大名が遭遇したもの、それは旧国人衆による土豪一揆であろう。それ窺うのが次の

史料である。

【史料四】

九月

仁宇大栗百姓共非働候之処ニ其元之者共少も無別儀馳走候由黒部久代

申聞候通一段満足此事候弥其元相談肝煎箇要候尚両人可申候也

恐々謹言

九月二日

三つきかし原

名主百姓中

（『阿淡年表秘録』天正十三年の項）

とある(23)。このように、阿波国内においても長宗我部氏の旧家臣であった国人衆が(24)、「百姓共非働候之処」とあるように大栗山（現名西郡神山町）や仁宇谷（那賀郡那賀町）等の山岳地域を中心に土豪一揆が、蜂須賀氏入国と同時に多発した。

そこで筆者の考えでは、豊臣・徳川の統一政権により承認された大名は、転封された彼らは領内の安定化を図る事を第一として考える。かつて九州平定の後、肥後に転封された佐々成政が、その直後に起こった国人一揆の責任をとらされ、豊臣秀吉により改易された。その事からもわかるように、領内に何かが起これば、改易される心配があったからである。

それは、蜂須賀氏にも言える事で、一連の土豪一揆が阿波国内の安定化つまりは、近世化を実施する上で、解決しなければいけない課題であった。四国平定以降、長宗我部氏が土佐にいる以外(25)、讃岐と伊予に転封してきた仙石氏や小早川氏等と蜂須賀氏には、特別な対立関係は生じていない。さらに慶長五（一六〇〇）年の関ヶ原合戦以降、土佐に入ってくる山内氏にもなんら対立構図が起きていない。

その事を考えると、阿波九城の配置目的は、土豪一揆対策に重点を置いた配置であったのではないだろうか。これにより、土豪一揆の鎮圧を急務とした蜂須賀氏は、既存の中世城館を最小限に改修したのに留めた事により、本田昇氏が指摘した、「他の領国と比べてその規模が小規模」である事が説明できる。また一国一城令で廃城となったものの、徹底的な破却を行なわなかった事が最近わかっている。例えば、大西城は、明治二三（一八九〇）年に国道建設の際、石垣の一部が壊された。また牛岐城は江戸初期に桑野川の一ノ堰を造る際に石垣が取り壊されているも、政治的意図は感じない。そして、近世後に作成された分間絵図においても、九城の遺構は良好に残っている事から、一国一城令廃城後も、良好な状態で城跡が残っていた事になる。

さらに、廃城後も陣屋が旧城内や山麓（一宮城は除く）にあった事、そして、在方知行制(26)を実施している事から、廃城後の破却が不徹底なものであったと考えられる。つまりは、有事の際に再利用する目的があったのではないだろうか。その際利用する目的こそ、土豪一揆等の国内における問題に対してだと考える。そして後の淡路洲本城との関係と比べると、阿波九城も一国一城令以降においても存続されるべき存在であった。

（二）益田豊後事件との関わりついて

阿波九城制度では、主家側（蜂須賀家）から平時でも兵力が派遣され、さらには支城主には仕置権が行使できた。そして、土豪一揆等の国内問題を抱える蜂須賀氏にとっては、元和元（一六一五）年の一国一城令以降も支城は存続したと考える事ができる。しかしこういった支城主の権限が、徳川政権期に入ると、領国経営において様々な弊害を催した。益田豊後事件がその例である。

益田氏は、蜂須賀氏と豊臣家家臣として同輩であり、阿波に入る直前の播磨龍野以来与力家老となり、撫養城の城番であった益田正忠とは親戚筋にあたる。そして正忠は蜂須賀正勝の異母弟にあたる。その関係により、稲田氏・賀嶋氏に次ぐ重鎮であった。豊後の父益田一政は中村右近太夫重友の後海部城を預けられた。その一政の家督を継ぐ形で一宮城を預けられていた、益田豊後守長行が海部城の支城主となった。事件の発端は、寛永一〇（一六三三）年二月に起こる。

【史料五】

二月廿五日
御家老中へ
益田豊後義、海部（部欠）治方不宜、百姓共令困窮旨、目安ヲ以国奉行迄申出、其上義、伝感状茂遣置候家来横井寸兵衛（一応之申出も之無）暇指遣候段、彼是不届ニヒ思召旨、上仰出
九月
益田豊後
公辺へ（重々不届之段）御届之上、名東郡大栗山へ被召込、弐拾人御扶持方被下、長坂三郎左ヱ門・片山半兵衛召連山中ニ趣、右番、渡辺堪左ヱ門・山田八左ヱ門・林弥五右ヱ門、壱人宛廿日更ニ相勤候様、被仰
嫡子
益田外記
海部郡山中へ被召込、拾五人御扶持方被下、右番、関九郎左ヱ門、青野分左ヱ門、廿日交ニ相勤候様、被仰付
外記嫡子
益田式部
仁宇山中へ被召込、拾五人御扶持方被下、右番、谷市兵衛・郷司藤左ヱ門、廿日ニ相勤候様、被仰付、

（「阿淡年表秘録」）

とある(27)。海部郡内の統治が、不届きなので百姓が困惑している。しかも、戦功（大坂の陣か）のあった、「伝感状茂遣置候」の横井寸兵衛を藩主に無断なく豊後が暇を出した。そこで、当時二代藩主であった、蜂須賀忠英が益田豊後を名東郡大栗山へ、嫡子外記を海部郡の山中へ、その嫡子式部を仁宇山へそれぞれ蟄居させた。しかも、史料中に「公辺へ（重々不届之段）御届之上」とあるように、公儀（幕府）に届けた上での実施であった事にも注目される。

一方で、益田豊後の方も幕府に、事件発覚から十二年後の正保三（一六四六）年に、蜂須賀家家老長谷川伊豆にこのような申し分をしている。

【史料六】

豊後申分ニ者
一長谷川伊豆儀、公儀御法度之大船作遣申候処、諸国御目附御通候時、右之船作直シ申候由、其節私儀者、煩罷在茂家来申聞候由
一長谷川伊豆儀、公儀御代替之時分土井大炊頭様へ誓紙ヲ差上候之由、坪内半三郎殿被仰聞候故、早速阿波守ニ申聞ニ申聞候由
一下田市左衛門と申者、吉利支丹宗門之由ニ而江戸ヨリ拓殖庄太夫・三浦次郎右衛門罷越、伊豆ニ吟味仕候へと申候処、目ヲ懸候下田故、不遂穿其通致置申候、其時それハ誰か申候と讃岐守殿御尋候得者、阿波守方ニ一季居之掃除坊主申候、久敷義故名ハ覚不申候、今ニ居申候も不存意候由、
（以下、略）

（「益田豊後　阿彦左馬之亟　一巻」）

とあり(28)弁明どころか、蜂須賀家が御法度に背いて大船を建造しているとか、キリシタンを匿っているといった、主家側の不正を糾弾している。この史料に注目するのは、豊後が土井利勝へ誓紙を差し上げているかどうかである。史料では、誓紙を差し上げていないと豊後は否定している。また史料中には主家に対し、「阿波守」と呼び捨てしている。

結局事件の審議は、発覚から十二年後の正保三年まで続いた。そして益田豊後は翌年二月阿波へ帰国の途中で誅殺され、同年五月に嫡子の外記と孫の式部も同年徳島城下の大安寺で誅殺された(29)。

この一連の益田豊後の動きを見てみると、その事件の背景には、支城主に与えられた統治権が大きかった事、また豊後自身、かつては蜂須賀家とは豊臣配下では同僚であった。そして、【史料六】から考えると、豊後は主家から分藩したい意向が、窺える事ができるのではないだろうか。さらに、阿波九城制度には、【史料一】であるように、当初は公権力の意向もあったが、徳川政権に移行すると、大名に対する城郭統制が豊臣政権よりも厳しくなってきた。また、初代藩主至鎮死去後、忠英が幼少であった為、藩祖家政が補佐していた。そして、この時期が補佐を解いた時期と重なり、忠英の藩政が確立したともいえる。そういう当時の社会情勢を、豊後は気付く事ができず改易となった。そこで、蜂須賀忠英はこの事件により、阿波九城の存続を見直さざるを得なくなり、事件発覚後の寛永一五（一六三八）年以の寛永令以降に支城を廃止するに至ったとも考えられる。

（三）淡路洲本城との関わり

益田豊後事件以前の元和元（一六一五）年、大坂の陣の功績により、蜂須賀至鎮は、淡路約七万石を拝領され、阿波も含め約二五万石の大名となった。そこで、脇城の支城主であった、稲田示稙（しげたね）が洲本城（兵庫県洲本市）に入る事になった。

洲本城は、脇坂安治や池田忠雄らの前領主の居城・支城であったため、その縄張り構造は徳島城や他の阿波九城を凌ぐ頑丈な構造となっている。また、三熊山上にある城郭部分と山麓にある居館部分と分かれており（図一八）、稲田氏は山上の城郭部分を使用せず、居館部分を使用した。

しかし、なぜ稲田氏は、他の九城の支城主とは異なり、支城の廃止以降も準城持大名的な特権を許されたのであろうか。稲田氏は、益田氏と同様蜂須賀氏と秀吉配下では同僚であった。大坂夏の陣の際、戦功により徳川家康・秀忠より「由良城代」として公認された背景からも、公儀のお墨付きとして稲田氏がいた事が窺える。高田徹氏は、稲田氏は公儀から公認された「城代」として、「稲田氏は、城代に就いた事で家格上昇と居城化の意識を高めた」と指摘している(30)。

（四）小結

四国平定の後に、阿波へ転封された蜂須賀氏に課せられた課題として、長宗我部氏と土豪一揆の対策が、急務であった事が窺える。そこで、急遽既存の中世城郭を最小限に改修する事になった。慶長五年の関ヶ原の合戦以降、西軍についた長宗我部氏は改易となり、他の大名との緊張関係は無くなったが、国内の土豪に関する問題は残った。そこで、元和の一国一城令以後も阿波九城は存続する事となったが、その支城主の権限が豊臣政権下とは旧態依然のまま残された結果、益田豊後のような事件が起きる結果となった。こういった事件は豊後に関わらず、例えば川島城の林道感は大坂の陣で、陣中において乱中し改易となっている(31)。徳川政権下において、こういった支城主の権限が藩政において様々は弊害を催していたのは、事実のようである。

おわりに

近世初頭において、支城制度を含む城郭政策には、豊臣・徳川統一政権に安堵された、近世大名の葛藤が見え隠れする。蜂須賀家においても例外ではなく、本論はその一部分しか紹介できなかった。しかしそれだけでも、当時の阿波国内の社会情勢を考えると、単に徳川政権に気を使う以外に様々な要因が重なって、それが阿波九城の縄張り構造にも反映している事が窺われる。

つまりは、織豊系城郭としての技術的導入が不完全である事。そして阿波九城のもつ性格つまりは、土豪一揆に重点を置いた配置であった。そして他の大名領国内にある織豊系城郭と比べて、その技術が未成熟であったと言えよう。しかし、後に伏見城や大坂城等といった当時の最新技術を導入した城の築城を経験した、蜂須賀氏がその技術の習得が未熟だったとは言いがたい。よって阿波国内における、織豊系城郭の技術導入としての到達点だといえよう。また阿波九城は、一国一城令以降も存続されるべき存在であった。しかし、益田豊後事件により、支城制度のあり方を転換せざるを得なくなり、寛永令により、廃止せざるを得なくなったと考えるのが妥当であろう。

今後は、本稿を踏み台にして、阿波九城と蜂須賀氏の領国支配を筆者が考える上での出発点として考え、在方知行制の解明や各支城（淡路も含む）の具体的な考察を、多角的な面で論を展開していきたい。

【付記】

徳島県では、去年度（二〇〇六年度）より、中世城館総合分布調査を五ヵ年計画で実施している。筆者も調査員として県内の中世城館に触れる機会が多くなった。この調査成果が、阿波九城の解明と県内にある中世城館の保存と研究の発展に、結びつく事を祈念したい。また本稿作成にあたって、須藤茂樹氏（徳島城博物館学芸員）と高田徹氏をはじめ城郭談話会の皆様方にご高配を賜った事を、ここに感謝し記します。

註

（1）『徳島県史』では、元和の一国一城令を支持しており、「阿淡年表秘録」にも同じ述がある。しかし、「阿波志」の脇城の項には、「寛永中墜つ」との記述があり、寛永令での廃城の意味合いを持った記述がある他、各市町村史にも、寛永令を支持している。また、「阿淡年表秘録」の寛永十五年の項にも、「此年　公儀ヨリ一国一城可為旨被仰出依之御本城之外悉被毀之」（「阿淡年表秘録」）『徳島県史料』第一巻、一九六四年、一〇〇頁、以下、秘録）とある。

（2）拙稿「慶長期豊前における細川氏の城郭政策と端城普請」『大分県地方史』第一九七号、大分県地方史研究会刊行、二〇〇六年と『史学論叢』前号（第三六号）参照のこと

（3）「秘録」、一頁～二頁。「秘録」は、中山茂純が嘉永四（一八五一）年に編纂された編纂史料。仁宇山城の山田宗登は、宗重の嫡子である。大坂の陣では、宗登が出陣し宗重が隠居として留守固めをしたことから、家督を継いだのが、大坂の陣以前と考えると、天正十三年に宗登が家督を継いだとは考えにくい。

（4）『阿波志』（写真帖は徳島県立図書館所蔵）は、文化年間（一八〇四～一八年）に儒学者佐野之憲によって作成された地誌書。

（5）「秘録」五頁～七頁

（6）シンポジウム「徳島城を再考する－石垣調査・レーダー探査を中心に－」二〇〇六年一〇月一日、於徳島市立徳島城博物館

（7）『御大典記念阿波藩民政史料』、一頁
（8）三好氏論文参照、五六頁・五七頁
（9）『鳴門市史』一九七六年所収、原図は文久三（一八六三）年作成、実寸は（タテ）一七四㎝×（ヨコ）一八〇㎝。
（10）『鳴門市史』、四九八頁
（11）国土交通省ホームページ内の航空写真閲覧ページ（http://w3land.mlit.go.jp）より転写。昭和四九（一九七四）年に撮影。
（12）阿波市吉野支所総務課所蔵
（13）脇城の城下町に関して、拙稿「戦国期脇城岩倉城とその城下町の復元について」『愛城研報告』第八号、愛知中世城郭研究会刊行、二〇〇四年を参照されたい。
（14）高田徹氏も蛭子神社付近を比定している（高田氏論文参照）。
（15）「仁宇城」『日本城郭大系』第十五巻。徳島県発行の遺跡分布地図によれば「小仁宇城」として比定している。一方で、蛭子神社の比低地には、「和食城」として表記している。いずれも、この二つの比低地には、城館が存在しており、規模から推定すると、「和食城」に山田宗重が在城していた事が、考えられる。
（16）阿波国内の中世城郭の特徴として、規模が他の地域と比べて小規模である事が上げられる。例えば、平均的に比高が五〇m未満に立地するケースが多い。本田昇氏は、この地域的特徴の理由を次のように述べている。

一、戦国時代になっても守護大名細川家が比較的長くその地位を保っていて、阿波国が戦国時代化に入るのが遅れたこと。

二、両細川家の争いから三好長慶の畿内制覇、そして、信長との抗争までの長期間、阿波の武士たちはたびかさなる畿内への出陣のため、畿内でこそ築城を行ったが、阿波国での築城はあまり行わなかった。また長期にわたる畿内への出兵は、阿波の武士たちを経済的にも軍事的にも疲弊させた。そのため長宗我部元親の阿波侵入に対しても有効な築城ができなかった。

三、長宗我部氏は四国制覇ののち、領国経営の整備や大規模築城など秀吉軍に対する迎撃体制が整わぬうちに四国征伐を受けて敗退したこと。

（「阿波の中世城郭」（下）、四三頁）

と指摘している。また、小規模であるものの、土塁を有し掘切等の防御施設を有しているいわば、「教科書」通りである事も、一つの特徴といえる。また、これら在地系の城郭の特徴と、侵入後長宗我部氏が改修を加えたもの、そして蜂須賀氏が改修をした城郭の特徴と、阿波国内の中世城郭を比較し、編年化をした本田氏の功績は大きい。
（17）海部城の縄張り図からも窺えるように、規模が大きい。また蜂須賀氏の改修が加えられたものの、自然地形を利用した曲輪の配置は、中世城郭の様相を示している。そこで、長宗我部氏の侵攻後駐在したとされているので、海部城の現在残る規模のベースには、長宗我部氏の改修があったと考えられる。
（18）註一六参照
（19）註一六参照。尚、阿波九城の石垣は徳島城を除いて、天正期の形態を見せており（北垣聡一郎『石垣普請』、法政大学出版、一九八七年）、蜂須賀氏入国直後の改修以降は、改修されていない事が窺えられる。これは、これ以上改修する必要はないと

いう、蜂須賀側の意思が見られる。但し、一宮城の石垣は、鏡石が用いられるなど、徳島城の石垣と共通点が見られる。これは、入国後一時的に居城した際、蜂須賀氏が居城化を意識したものだと考える事ができる。石垣に関しては、今後正確な実測に基づいた上で編年化が望まれる。

(20)高田氏論文参照

(21)城下町再編には、阿波九城廃止後の元和・寛永期と、武家地の拡張を計った正保・寛文期、そして町屋の再編を目的とした、延宝・元禄期の三段階に分かれる事ができる(三好氏論文参照)。

(22)三好氏論文参照

(23)「秘録」一頁・二頁

(24)須藤茂樹氏(徳島市立徳島城博物館学芸員)の御教示。長宗我部元親は天正三(一五七五)年以降の阿波侵攻以前から、阿波国内の在地勢力を諜略し、長宗我部氏の軍門に降った者の中には、家臣として列せられた事が、「長宗我部地検帳」の中にも記載されている。

(25)註二四と同じく須藤氏の御教示。天正十四(一五八九)年に長宗我部氏を攻めようとする旨を、豊臣秀吉が蜂須賀正勝に宛てた発給文書がある。

(26)阿波藩では、旧国人層の子孫を庄屋に取り立て、また家臣として仕官していた事が、蜂須賀家家中の殆ど家臣の出自を記した「蜂須賀家家臣成立書並系図共」(徳島大学所蔵)に記入している。そして一例として、土佐泊(鳴門市)にいた森水軍の森志摩守とその一族は、椿泊(阿南市)を拝領され、屋敷を構えている。また道明寺(阿南市)は森家の菩提寺であり、歴代当主の墓標には、「椿泊領主」と記されている。

(27)「秘録」九〇頁・九一頁

(28)「阿彦左馬之亟 一巻 外御起證文案子一通」『蜂須賀家文書』(国文学研究史料館所蔵)。阿彦左馬之亟は益田豊後の異母弟にあたる人物で、事件後、加賀へ逃亡し浪人の身になっていた。事件が解決した後、左馬之亟は日光東照宮御門主の仲介で、水野隼人とよばれる人物の家臣に仕官している。

(29)「秘録」一二〇頁。一方で主家側にかけられた不正は、大船はすぐに取り壊し、キリシタンは匿っていないと主張して、咎められる事はなかった(石躍氏論文参照)。

(30)高田氏論文参照。蜂須賀氏の淡路拝領直後、前領主池田忠雄が居城としていた、由良城(兵庫県洲本市)を使用し、寛永十一(一六三四)年に、稲田氏が洲本城へ移った(「由良引け」)。一方で、「秘録」寛永十一年の項には、稲田氏に命じ「淡州由良御城破却之節」とあり(「秘録」九一頁)、移転後すぐに破却が始まった事がわかる。つまりは、前年におきた益田豊後事件の影響で、稲田氏も同様の事件を起す事を考慮した、主家側が由良城の破却を実行したと窺える。稲田家が洲本城の山上部分の使用をせず、麓の居館部分のみを使用したことは、主家に対する意思表示とも考えられる。この点が益田氏と異なる点だといえるだろう。しかし、蜂須賀家と稲田家との関係が、単なる主従関係とは言いがたい事が、本稿でも窺える。そして稲田氏の淡路拝領が、後に明治三(一八七〇)年に起きた分藩騒動である「稲田騒動(庚子事変)」の遠因になった事を考慮したい。

(31)林道感は、本文の中で述べている通り、大坂の陣で徳川家康から、

戦功により感状を貰っている。なのに、陣中で乱心したという事は不自然である。つまりは、林家改易の背景には主家（蜂須賀家）の意向が窺え、益田豊後と同様に、蜂須賀家の領国経営に不都合が生じたと考える事を付け加えおく。

主要参考文献

石躍胤央「阿波藩益田豊後事件関係史料（一）」『徳島大学教養部紀要』、第二七巻、徳島大学教養部刊行、一九九二年
『角川地名大辞典三六徳島』、角川書店、一九八六年
高田徹「脇坂・池田・蜂須賀領における淡路洲本城の変遷」『淡路洲本城』、城郭談話会刊行、一九九五年
『中世城郭事典』第三巻、新人物往来社、一九八七年
『日本城郭大系』第十五巻、新人物往来社、一九八〇年
本田昇「阿波の中世城郭」(上)・(下)、『史窓』第十七号・第十八号、徳島県地方史研究会刊行、一九八六年・一九八七年
三好昭一郎『近世地方都市成立史の研究』喜寿記念日本史論集第一部、モウラ、二〇〇六年

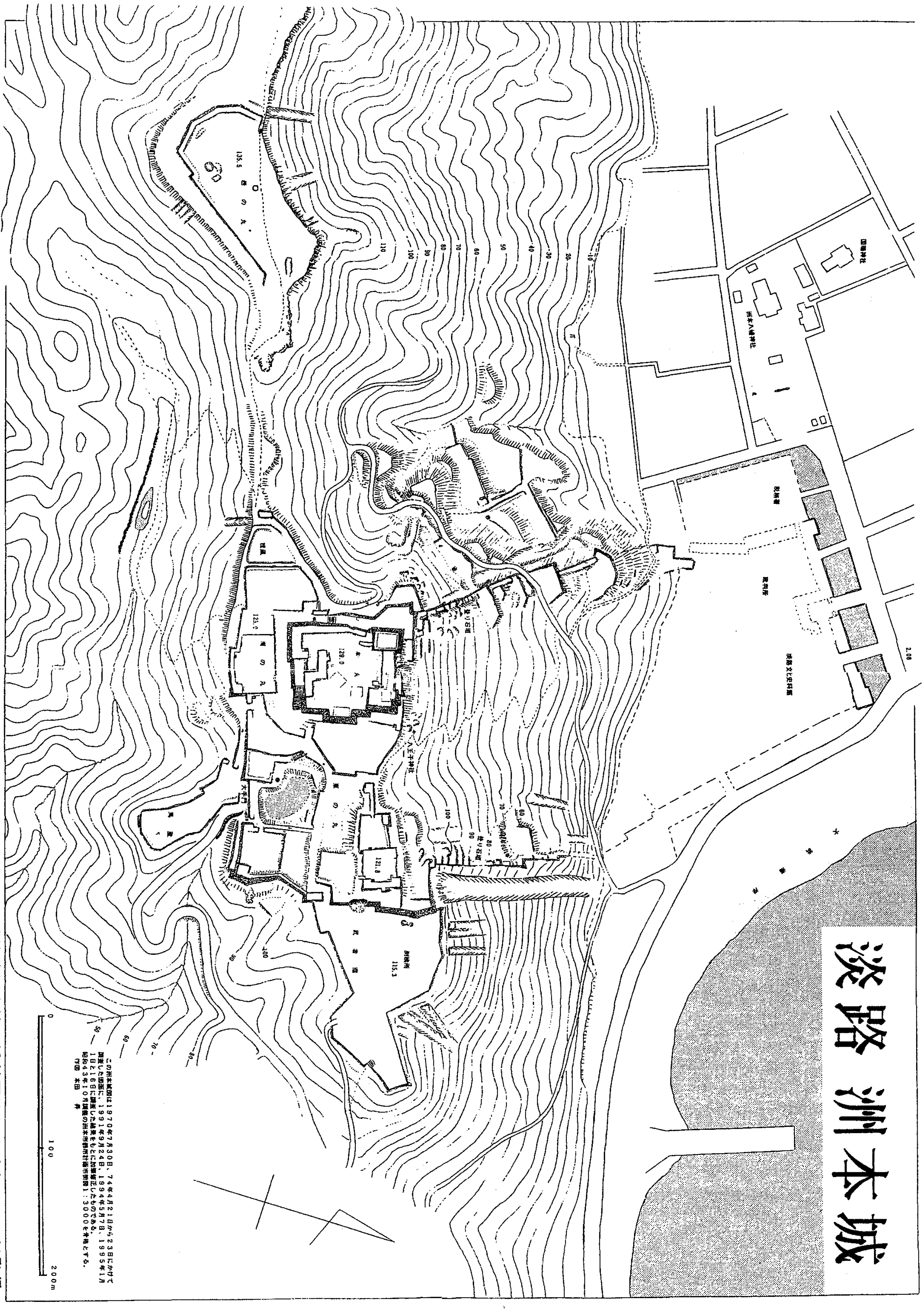



図18　洲本城縄張り図（本田昇氏作図、『淡路洲本城』より転載。）